

原胤が急死したのは、それから間もなくのことである。看立てによれば、毒殺であった。

「やはり千葉家が……」

隠居していた原全岳院善寛は、主家である千葉家を胡散臭く思った。

真里谷側の陰謀よりもそちらを疑ったのは、やはり一度崩れた信頼関係によるところが大きい。

「当家があるからこそ、千葉の御家も存続できるのだ。当家を潰して没落することも見通せないとは、情けない話である。当方滅亡とは、このことじゃ」

この言葉は、流れ流れて千葉介勝胤の耳に入った。

当方滅亡とは、かつて太田道灌が主君に謀殺されたとき今際に発したものだ。原氏を太田道灌に、千葉氏を扇谷上杉氏に例えた言葉である。

「凶々しき物云いよ。たかが傍流家臣の分際で、道灌入道を騙るとは」

嘲笑混じりに吹きながらも、建前上、千葉勝胤は弔問の死者を小弓城へと差し向けた。信が置けぬからこそ、意固地になるのも世の常である。

千葉勝胤は原全岳院善寛への不信感を抱きつつも

「こういふときだからこそ」と、香典や見舞いの品を、気持より多く用立てさせた。

そのことを、悪し様に囁かれる事もまた、人の世の常である。信頼もない相手があることは、過分であっても些少であっても、決して好意的には受け取られないのである。

そんな風聞を耳にして、千葉勝胤の心は騒つた。

「今にみておれよ……原ずれが」

この吐き捨てた言葉さえも、いつしか巡り巡って、原入道善寛の耳に届いた。双方は、同じ不信感のなかで、憎悪を燻らせていた。

このような上総国の諍いとは余所に、里見義通は義豊に対し、読めぬ真意に苛立ちさえ覚え

ていた。腹の底を明かさぬ嫡男は、まだ分際に逆らい、二統を試みる所存なのだろうか。そのことを質しても、正否のつかぬ物云いである。

一家を頂点に従う臣下は二君に仕えぬ美徳など、当時は幻想である。江戸時代に入り、泰平のなかで朱子学から根付いたその考えは、一世紀も以前のこの時代には無縁なのである。忠義よりも己の損得、益する代表のもとで栄えること、それが戦国だった。一統大名の思想が理想であるというのは、そういうことだった。

そんな夢よりも、在地をつなぎ止めることこそ、当時の国を統べる者の義務である。その下地を理解しない義豊の空想理論は、里見家の命運さえ危うくする。

新し過ぎる思想といつてよい。その新しさに、玉隠英瑣のような知識階級が義豊を快く思ってくれるのは、よい。

が、せいぜいそこまでだ。

古河公方家にも関東管領家にも為せぬ二統を、安房の豪族が先んじてなんとしようか。

分際とは、つまりはそういうことだった。

しかし、世の中とは、定規のとおりにかぬ。

得体の知れぬ義豊に同調する者が現れたのだ。

烏山左衛門大夫時貞などは、率先して附いた者である。もつとも烏山時貞の娘は義豊の正室、娘婿を盛り立てようとするのは当然といえる。

更にいえば、烏山時貞の妻は義豊の叔母にあたる。一皮剥けば、里見との縁を深めたい在地の欲であり、自明の理といえよう。烏山時貞のように義豊に附く者の本音は、義通の代では立身適わぬといった欲得に過ぎない。義通の世で適わぬ在地の欲を、義豊の世に期待したまでといえばよからうか。二統の思想は、あくまで義豊個人のものでしかないのである。

「兄さまは小さい男ですね」

義豊の妹・美は笑いながら、言葉少ない兄を罵倒した。

「小さいか？」

「小さい、小さい。意地の張り方が小さい」

志の高さは、所詮安房の誰にも解るまい。義

豊はたしかに明晰な頭脳を持っていた。自然、見下す視線が否めない。そんな義豊が唯一、雄弁を許すのが、妹である美なのである。

「お前が男で生まれたのなら、きっと思惟を介したであろう」

「でも、私は兄さまのような、小さい男に嫁ぎたくない」

そういつて、美は屈託なく笑った。

十
十
十

上総大乱(3)

夢酔 藤山